

れて乗せてあるのは夜間の覆い用か。何を作っているか不明。天津の路上で苺らしいものが甘梅（と読めた）として売られていたので、苺かも知れない。かもめのような白い大きめの鳥が飛んでいるのを見る。北京では鳥を一度もみていない。

一般道路に入ると小型の耕運機がリヤカーをひいているのが見られる。戦後日本に耕運機が入ってきたときの東北の農村の光景を思い出す。本当に小さな小型三輪車も見られる。

他方、上海－蘇州間の汽車の窓外に穂の出る直前と思われる緑豊かな麦畑、菜の花畑が広がる。目に爽やか。蔬菜畑も散在している。芽は出ていないが桑畑、葡萄畑もある。網をはって魚を養殖している池もある。農家は白色の2階建て。北京－天津間でみた農村風景とは全く対象的。豊かな印象を受ける。水田自体を確認することはできなかったが、稲作と麦ないし菜種の二毛作と見た。麦と水稻、菜種と水稻の二毛作を行っていた戦後の日本の農村を思い出す。上海－蘇州は北緯30度の北に位置して、丁度鹿児島市と比較される位置にあることを実感する。

運河が鉄道沿いだけでなく遠くにまで延びているのが見える。水は綺麗とは言えないが、現にエンジン付や手漕の小舟がいきかっている。まさに南船北馬。北の馬耕小麦作と南の水田稲作、ヨーロッパの農業とアジアの農業が中国でドッキングしていると学生時代に習ったことを思い出す。訪中中に南船北馬について古川氏が憲法学者らしく北の政治・軍事、南の経済と評するのを聴いて、なるほどと新たな見方を教わった。

再び余談になるが、蘇州には運河から枝分かれして各戸を結ぶ細い堀割りがあって、それを日本からの輸入語であるクリークと呼ぶと通訳の小姐が言っていた。creek はイギリス本国では入り江を指すが、イギリスの植民地の小川や支流を指すと辞書にあるので、むしろ上海租界あたりに住むイギリス人が蘇州に遊んだ時呼んだものと考えるのが妥当であろう。佐賀クリークという呼び方も逆にその影響を受けたものかもしれない。定かならず。

訪中印象記

——「発展」と「落差」と——

井 上 裕

3月15日から21日までの短い訪中の時期は、たまたま第8期全国人民代表大会第3回会議——いわゆる全人代の開催（3月5日～18日）と重なっていた。天安門広場の人民大会堂には、折からの寒風のもとで多くの紅旗が翻っており、その紅の色が鮮烈な印象だった。

かつて、魯迅は『忘却のための記念』というエッセイの中で、「城頭に変幻す大王の旗」という詩の一節を刻したが、この「旗」とは彼が悲憤に沈潜しつつ指摘した当時の「支配者」の旗である。いうまでもなく、「旗」は往時の悲憤の対象ではなくなった。1949年の建国以来約半世紀を経て、それは、たしかに新たな発展への色鮮やかな「旗」であるにはちがいない。

ところで、駆け足の訪中での私の印象を集約的に表現すると、一つには巨大な「発展」のポテンシャルの実感であり、二つにはその半面での「格差・落差・矛盾」の存在への思いであった。

まず、前者についていえば、北京や上海とくに浦東開発区などに林立するビル、工場など大きく・超高層の建築群。完工したものもあり、建設途上のものもあり、中国は、明治の日本について森鷗外が表現したように、まさに「普請中」である。それから、われわれが訪問した中国の各企業経営者の多くの「自信・自負」。たとえば、北京大華シャツ工場の牛希芝社長は、自社の「天壇・白塔・玄女」等ブランドの他に、米国のアロー、フランスのイブ・サン・ローランなどのOEMも行い、輸出比率約75%にも及ぶが、年率10%強の増産の実績と計画を述べた。また、上海の浦東開発区に立地する上海日立電器有限公司（日立製作所と中国企業との合弁。93年1月設立。空調器用コンプレッサー製造）の生産高は、94年30万台の実績に対し、95年50万台、96年100万台の「倍倍」目標という。さらに、浦東開発区自体の開発構想は、同行した上海社会学院スタッフによれば、95年までに水道・電気・道路等のインフラを整備、2000年までに主要工場の建設配置、2030年までに巨大で自立的な新しい都市空間自体の整備・完成ということである。彼の説明だと、先行する深圳特区の開発は、この浦東新開発区建設のための一種の予備実験と位置づけられる。

実際、N I E S、A S E A Nなどアジアのいわゆる成長・発展経済地域（Emerging Economies）の中でも、中国の近年の成長ぶりはいちじるしい。94年の実質GDP成長率は韓国8.4%、台湾6.5%、香港5.5%、シンガポール10.1%、マレーシア8.7%、タイ8.5%、インドネシア6.8%などだったが、中国のそれは92年13.6%、93年13.4%、94年11.8%と、昭和40年代の日本の高度成長最盛期に匹敵する。とくに、鉱工業生産増加率はそれぞれ27.5%、28.0%、21.4%と、工業化を軸とする経済発展の進行が明瞭である。中国はいま、赤松要の雁行形態論やバーノンのプロダクト・サイクル論にいう「生産のうねり」の段階にあるとすれば、このようにして増大する製品供給力が、近い将来に巨大な「輸出のうねり」に移行する可能性は十分に想定し得よう。事実、輸出増加率は92年18.2%、93年8.0%から、94年31.9%、95年1～3月期（前年比）62.0%となっている（計数は『日本銀行月報』95年6月号に

よる)。

こうしてみると、現在の中国が、その「改革・開放路線」のもとでの社会主義市場経済化を押し進め、一段の発展・拡大への膨大なポテンシャルを形成しつつあるという感は強い。だが、このことを「光」とすれば、その半面での「影」すなわち、いろいろな面での「格差・落差・矛盾」の印象もまた強かった。

われわれが実見した若干の例をあげるとつぎのようなことがある。前述の林立する高層建築群の一方では、北京市街の内や明の十三陵、万里の長城に至る途中で古びたレンガ造りの平屋の民家が立ち並ぶ。浦東開発区の現代的な巨大開発の半面で、近郊の自由市場では野菜・果実・その他の食品類や雑貨類が道路いっばいに広がり、荷馬車が行き交っている。北京や上海の市内で綺麗にメーカーシップをほどこし、先端のファッションをまとう女性たちもいれば、短髪・日焼け顔・粗末な綿服の女性も多い。スーツを誇らしげに着た男性たちと（スーツは現在、一種のステータス・シンボルだそうである）、ややクタびれた人民服・人民帽の男性たち。東洋のベニスと謳われる蘇州の古運河はゴミと汚物の浮遊する流れであり、その流域の民家の住民たちは運河の水で虎子（おマル）を洗っている。

さらに印象的だったのは、乞食の存在である。故宮の入口では親子づれの乞食がわれわれにつきまとい、上海の駅頭でも幼児を含む乞食が金をねだって迫る。ちょうど、全人代が開催中であっただけに、社会主義中国の建設・前進と乞食との共存関係への異和感があったことは否めない。

訪中より帰国後に目にしたある資料によると、中国経済は全体として発展過程にあるものの、沿海部とくに沿海南部と内陸部との格差がいちじるしく・また近年拡大傾向にある。たとえば、93年時点で、沿海部（広西・広東・福建、浙江、江蘇、山東、河北、遼寧の各省。北京・上海・天津を含む）の国内面積シェアは13.5%、人口シェア41.2%だが、GDPシェアは58.3%、工業生産額シェアは67.1%。これに対し、内陸中部（湖南、江西、湖北、安徽、河南、黒竜江、吉林、山西、内蒙古）では、それぞれ29.9%、35.9%、26.9%、22.3%、内陸西部（四川、貴州、雲南、陝西、甘肅、青海、寧夏、新疆、チベット）では56.6%、22.9%、14.7%、10.6と、面積や人口にくらべ、経済力の分布がかなり不均等である。この結果、1人あたりGDPでみると、沿海部669ドルに対し、内陸中部355ドル、内陸西部304ドルと格差がいちじるしい。また、農民所得の都市住民所得に対する比率は、85年の58.0%から93年39.4%へと大幅に低下している（経済企画庁『経済月報』平成7年4月号「中国、広がる地域間所得格差」、日経新聞7年5月20日、南亮進「中国、拡大する所得格差」による）。

この地域間格差拡大の主要因は、70年代終り頃以降の沿海部発展優先の経済開発政策があり、現在では、格差是正の政策路線に取り組んでいるようではある。

さらにもう一つ。GDP、工業生産、輸出などの顕著な発展・成長での一方で、インフレ傾向の加速も大きな矛盾の一側面として見逃せない。中国の消費者物価上昇率は、92年の6.4%から、93年14.7%、94年24.2%、95年1～3月（前年比）22.6%と、このところの高騰ぶりが目につく。その一因としてのマネーサプライのめだった増勢があり、M2（現金通貨・企業預金・個人預金の計）増加率は92年32.3%、93年21.6%、94年34.4%にも達する（上記『日本銀行月報』による）。われわれの訪問地の一つである上海の銀行・商社等の近代的なビルの立ち並ぶいわゆるバンドの夕暮れの裏路地では、明日の株価情報を交換するマネー追求の人々の群れがあった。

今回の全人代では、初の中央銀行法としての「人民銀行法」が採択、この法には、金融政策の目標としての「通貨価値の安定を保ち、これにより経済成長を促進すること」の明定、政策諸手段の整備として公定歩合、準備預金、公開市場操作等の列挙があるとのことである。インフレ抑制も中国の直面する大きな課題といわねばならない。

いずれにしても、発展への巨大な可能性を主軸とする一方で、多様な格差・矛盾も抱えて、中国はいま一種の混沌状態にあるように思われる。ところで、われわれの日程が終りに近づいた3月20日、宿舎の上海和平飯店のテレビで地下鉄サリン事件発生 of ニュースに接して、皆、ショックを受けた。日本もまた、中国とは異質・異次元の混沌状態のさなかにある。

（6月21日記）

1995年3月の中国断想

儀 我 壮一郎

今回の訪中は、天の時・地の利・人の和において最高に恵まれていた。麻島団長・高橋事務局長のなみなみならぬ御尽力と、三輪顧問の周到な「根回し」の御高配の賜物である。企業管理協会をはじめ、中国側の終始変らぬ歓迎は、心あたたまるものであった。心から御礼申し上げたい。

私は、1923（大正12）年9月、東京四谷で関東大震災を体験したが、その後、1926年（大正15）年4月、中国の奉天（現在瀋陽）で日本人小学校に入学し、29（昭和4）年帰国した。敗戦後は、1963年、85年、86年、93年、94年、95年と今回は6回目の訪中に当たる。95年の